

平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18530510

研究課題名（和文） 絵本の読み聞かせに関する基礎研究と ADHD 児教育への応用

研究課題名（英文） Basic Study on the Practice of Picture Book Reading and its Application to Education for the Children with ADHD.

研究代表者

近藤 文里 (KONDO FUMISATO)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：00133489

研究成果の概要：

本研究は、絵本の読み聞かせに関する基礎研究と、ADHDを含む発達障害児への継続的な読み聞かせ実践に関する研究から構成されている。基礎研究は、絵本の読み聞かせ実践者に対するアンケート調査、読み聞かせの読み手の行動分析、そして聞き手（健常幼児）の行動分析を行った。また、発達障害児への読み聞かせに関する実践的研究では健常幼児を対象とした時と同様の分析方法に基づいた。研究の結果、本研究の分析で用いた行動指標は読み手の行動のみならず、聞き手の行動を分析するうえで有効であることが認められた。また、聞き手の行動分析に用いた行動指標も、絵本のどのような場面で感情の喚起があるのか、また、読み聞かせ過程での子どもの行動の変化から絵本毎に分析する有効な手がかりになるものであることが確かめられた。さらに、発達障害児への継続的な読み聞かせ実践や、読み聞かせ実践者へのアンケート調査からは、絵本の選択が重要な問題であることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	390,000	2,490,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達障害・ADHD・絵本・読み聞かせ

1. 研究開始当初の背景

近年、絵本や本の読み聞かせの重要性が益々認識されるようになってきたが、注意欠陥・多動性障害児（以下、ADHD児と略す）を対象とした読み聞かせの研究はほとんどない。また、ADHD児を含む発達障害児への絵本

の読み聞かせは教育効果は極めて大きいものと予想されるが、注意に弱さをもっているこれらの子ども達についての研究は殆どなく、これらの子どもも参加できる条件とは何であるのかは明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究は、絵本の読み聞かせという行為に関与する諸要因を明らかにする基礎研究とADHD児を中心とした発達障害児への絵本の読み聞かせ実践という2つの部分で構成されている。

(1) 読み聞かせに関する基礎研究に関して① 読み聞かせ実践者へのアンケート調査

絵本の読み聞かせを長年実践しておられる方にアンケート調査を行い、読み聞かせの過程でどのようなことを重視されているか、また、ADHD児が読み聞かせに参加している場合にどのような点に配慮をしているのか、について回答を求めた。

② 読み聞かせにおける読み手の行動分析

絵本を読み聞かせている最中における読み手の行動を、視覚行動、発話、身振りについてビデオ分析を行う。

③ 読み聞かせにおける聞き手の行動分析

聞き手についてもビデオ分析を行うなかで、それらが心理学的にどのような意味をもっているのかを明らかにする。

特に、本研究では発達的な視点を重視することにより、絵本の読み聞かせでは話の筋が追えるかどうかについて検討することを目的とした。特に、5歳前半児と後半児の行動を詳細に比較することで、それぞれの特徴を明確にする。

(2) 発達障害児への継続的な読み聞かせの実践的研究

以上のような絵本の読み聞かせに関する基礎研究で用いた方法により、発達障害児への継続的な読み聞かせ実践を行ない、注意機能に弱さがある子ども達の変化をとらえようとした。なお、ここでは絵本の違いによる効果についても検討する。

3. 研究の方法

(1) 読み聞かせ実践者へのアンケート調査に関して

アンケート調査を行ううえで重視したことは、読み聞かせの実践者が、どのような配慮を行っているのかについて、「環境設定での配慮」、「導入における配慮」、「読んでいく上での配慮」、「読み終わった後での配慮」に分けて回答を求めたことである。また、多動や不注意な子どもが読み聞かせの対象となる場合についても読み聞かせの各過程で、どのような配慮を行っているのかについて、読み聞かせの実践者の考えを尋ねた。

(2) 読み手の行動分析に関して

読み聞かせ過程で撮影されたビデオ分析の方法について述べる。読み手の行動を録画

したビデオに関して、「視点」、「発話・発声」、「身ぶり」、「表情」、「視覚呈示」、「声色」という6つの分析カテゴリーについて時間見本法を使い、行動指標に該当する個数を計数した。観察の時間単位は15秒を1単位とし、行動指標に該当する行動があるかどうかをチェックしていく。また、検討方法としては、次の2つの方法にもとづいた。

① 5人の読み聞かせ実践家の比較

絵本の読み聞かせ方法には読み聞かせ実践者の個人毎の違いが考えられる。そこで、5人の読み聞かせ実践者に同じ絵本を読み聞かせてもらい、そこでの行動比較を行う。

② 1人の熟達した読み手の行動分析

長年、絵本の読み聞かせに従事してきた1人の熟達者の行動分析を行うが、読み聞かせ対象が幼児である場合と、大学院生である場合の比較を行う。これによって、読み聞かせる対象者が変化しても変化しない読み手の行動が明らかになるだろうし、対象者が幼児の場合はどのような配慮が読み手の行動に現われるかを明らかにできると考えた。

(3) 聞き手の行動分析に関して

聞き手の行動についても、時間見本法で、「視点」、「発話」、「動作」という3つの側面から行動を分析していく。

また、既に述べたように、本研究では5歳前半児と後半児の行動を明確にするために、異なる絵本での反応を調べる。特に、読み聞かせ過程において話の筋道を理解した反応なのか、場面毎に生じる誘発的な反応なのかを区別する。また、読み聞かせ中の行動において、他者に気遣ったり、話のあらすじを隣の聞き手と確認し合う行動がいつ頃から出現するのか明らかにする。

(4) 発達障害児への継続的な読み聞かせに関して

ADHD児を含む発達障害児に対する継続的な絵本の読み聞かせを行い、上で述べたビデオ分析法により絵本の違いによる行動の差異や、行動の変容について検討する。

4. 研究成果

(1) 読み聞かせ実践者へのアンケート調査研究から得られた成果

①アンケート調査では、読み聞かせの実践者がもっとも重視していることは絵本の選択であることが明らかになった。また、読み聞かせ実践者が重視することとして、絵本の選択に続いて、読み方のスキル、読み手との信頼関係、環境設定も大切にしていることが明らかとなった。これらに関して、アンケートに丁寧に記述された内容は実に示唆に富

むものであった。このような長年読み聞かせの経験を蓄積された内容は、保育や幼児教育に就こうとしている学生に引き継がれるべきものであるという印象をもった。

②アンケート調査では、ADHD児のような不注意で多動な子どもがいた場合という想定で、「読み聞かせの場面作り」「導入」「読んでいくうえで」「読み終わった後で」配慮することについて尋ねた。その結果、ここでも本の選択がもっとも重要という回答であった。その他、この質問に対する回答では、特別支援教育で重視されていることと共通性が認められた。それは、導入では絵本への注目を促したり、聞かすときのルールが明確にされていることにもみられる。また、読んでいく過程で不注意や多動な行動が現われても「無理やり座らせたりせず、関心をもつようになるのを待つ」というように、子どものこれからを信頼しつつ、気にはしているが敢えて注意しない、という積極的無視を貫くことが大切と考えられている。さらに、「読み終わった後で」配慮することについては、よく聞けたときには、しっかりと褒めるという回答が見られた。

(2) 読み手の行動分析を行った結果

①5人の読み聞かせ実践家の比較を行った研究の結果から、「視点」の「子どもを見ている」という行動指標については、その読み手の思い、読み手と聞き手の交流、聞き手の反応などが読み取れた。また、読み手の「発話・発声」に関しては、読んでいくうえで「間・沈黙」が読み手で共通に重視されていることが認められた。「身ぶり」は多くは見られなかったが、聞き手が幼い子どもであったり、絵本に特徴があったりすれば現れる行動であると考えられた。また、「表情」も大げさなものは見られないが、読み手と聞き手との関係を作るうえで大切であるだけでなく、そのような豊かな表情を有することは、読み手の要素としても重要と考えられた。「視覚呈示」と「声色」については、読み聞かせのスキルとしても、またアンケートの回答からも、読み手に重視されていることが明らかにされた。このように、これら6つの分析カテゴリー及びそれぞれの項目に設けられた行動指標は、読み聞かせの読み手の分析をするにあたって、有効な指標となることが明らかとなった。

②次に、1人の熟達した読み手の行動分析をした研究からは、次のような成果が得られた。すなわち、聞き手が幼児である時は多く認められるが大人では認められない行動指標があった。それは、「子どもを見ている」、

「身ぶり」、「子どもへの笑顔」、「絵をしかり見せる」であった。このような読み手の行動は、子どもが絵本を理解する助けになるものであったり、読み聞かせの雰囲気やリラックスしたものに読み手の意図を反映したものであると考えられた。

一方、聞き手が大人でも子どもでも差が認められなかった行動指標があることが明らかになった。それは、「間・沈黙」、「表紙」や「裏表紙」の呈示、そして読みのテンポに関するいくつかの行動指標であった。このような行動指標が認められたことは、個々の絵本にはその本に適した読み聞かせの速度があること、また、個々の場面では間や沈黙の挿入が大切であること、さらには、絵本の表紙や裏表紙の呈示は絵本の内容理解に影響する重要なものが含まれていること。これらの認識が熟達した読み手にはしっかりとした形で保持されていることを反映した結果であると考えられる。

(3) 聞き手の行動分析を行った結果

①5歳半を境に絵本の理解が大きく発達することが明らかになった。すなわち、分析カテゴリー「視点」に関しては、5歳前半児も後半児も絵本をしかり見ている点では差は認められなかった。しかし、分析カテゴリーの「発話」については、5歳前半児では「絵本の内容に関連した意見表出」「感情表出」が多く認められ、絵本への反応がそのまま言葉に結びつく特徴が認められた。これに対して、5歳後半児は、「友達と絵本のことで話し合う」ことが多く認められ、隣の子とうなずき合ったり、笑い合ったりして友達との相互作用のなかで絵本を楽しむ姿が認められた。また、分析カテゴリー「動作」でも絵本への反応が直接的に動作に結びつくのが5歳前半児であるのに対して、5歳後半児は反応が外に表出されることは少なかった。また、5歳前半児の場合、「対象操作を伴った行為」は、読まれる絵本が増える度に多く認められ、同じ姿勢で聞いていることの困難さを示唆するものとなった。

②次に、読み聞かせの過程で観察された子どもの発話内容と感情表出を検討すると、5歳前半児は言葉の響きや音の面白さに興味をもち、そのリズムの良さを大変喜ぶことが示された。これに対して、5歳後半児は個々の場面で大きな声で笑ったり、ひっくり返ったりすることは少ない。笑い方も抑制気味ではあるが、絵本の話のひとつの筋としてとらえていることが認められた。

③聞き手についてビデオ分析に用いた行動指標の有効性に関して言えば、絵本毎、年

年齢毎に違ったパターンが観察され、絵本の読み聞かせ過程を研究するうえで有効な指標であることが明らかになった。このことは5歳前半児と後半児についての聞き手の比較に関する追試的研究においても結果の再現可能性が裏づけられた。

(4) 発達障害児を対象とした研究の成果

①発達障害児を対象とした研究では健常幼児について検討した研究と符合する結果が得られた。すなわち、発達年齢が5歳以上である発達障害児の場合は、周囲の子ども達を意識し、「他の子どもを見る」行動が多く認められたことである。なぜならば、絵本に集中できていないことではなく、絵本に身を乗り出し、絵本に強く集中しながらも、他児を意識することが認められたからである。つまり、絵本を楽しみながら同時に相手の立場や気持ちがわかるようになるという自我の発達の側面を表した行動であると考えられた。

一方、発達年齢で5歳に達していない子ども達に関しては、怖かったりはらはらしたりする感情がそのまま言葉になって表現されることが認められた。

それでは、対象とした子ども達に共通して認められたことは何だろうか。それは、発達年齢にかかわらず、笑いを中心とした感情表出が豊かに表現されていたことである。また、視点に関する分析からも、全員が絵本の読み聞かせにおいてしっかりと「絵本・読み手を見ている」ことが認められた。

②このように読み聞かせが子ども達にとって楽しいものになったのはなぜだろうか。このことを考えるうえで大切だと思われることは2つある。第1は、絵本の選択に関して、である。本研究で絵本の選択を行うに際しては、読み聞かせ実践者の意見を参考にしたことが良かったと思われる。それは、繰り返しがある絵本、リズムがある絵本、動作を伴う絵本、絵がはっきりしている絵本、音（歌）が入ってくる絵本、子どもが興味をもっている絵本、そして、だいたい5歳くらいの子どものであれば3歳児に読むくらいの絵本を選択するとよい、という意見を手がかりにして絵本を選択した。第2は、継続して絵本の読み聞かせが行われたことである。このような継続した取り組みの中で、子ども達は読み聞かせに対して予期や期待をもつようになったと言える。

最後に、本研究の分析で用いた行動指標は読み手の行動のみならず、聞き手の行動を分析するうえでも有効であることが認められ

た。このような分析の方法が、読み手の読み聞かせの特徴を抽出するだけでなく、幼稚園教諭や保育士の絵本の読み聞かせスキルを向上させるうえで手がかりになるものである。

また、聞き手の行動分析に用いた行動指標も、絵本のどのような場面で感情の喚起があるのか、について絵本毎に分析する有効な手がかりになると思われる。

さらに、発達障害児への継続的な読み聞かせ実践や、読み聞かせ実践者へのアンケート調査からは、絵本の選択が極めて重要な問題であることが明らかになった。この点についての研究をさらに深めていく必要があると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①辻元千佳子・近藤文里 2009 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(7)―5歳前半児と後半児の聞き手の比較に関する追試的研究―. 滋賀大学教育学部教育実践総合センター紀要, 17巻, 9-14. 査読無し

②近藤文里・辻元千佳子 2008 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(6)―絵本の読み聞かせ実践者へのアンケート調査―. 滋賀大学教育学部紀要, 第58号, 17-29. 査読無し

③近藤文里・辻元千佳子 2008 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(5)―発達障害児への継続的な読み聞かせ実践―. 滋賀大学教育学部紀要, 第58号, 1-15. 査読無し

④辻元千佳子・近藤文里 2008 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(4)―熟達した読み手の行動分析―. 滋賀大学教育学部教育実践総合センター紀要, 16巻, 1-6. 査読無し

⑤近藤文里・辻元千佳子 2007 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(3)―5歳前半児と5歳後半児の聞き手の比較―. 滋賀大学教育学部紀要, 第57号, 27-38. 査読無し

⑥辻元千佳子・近藤文里 2007 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用(2)―絵本の読み聞かせにおける読み手の行動的差異に関する研究―. 滋賀大学教育学部紀要, 第57号, 15-26. 査読無し

⑦近藤文里・辻元千佳子 2006 絵本の

読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用（1）—研究の展望と本研究の課題—. 滋賀大学教育学部紀要, 第 56 号, 65-75. 査読無し

〔図書〕（計 1 件）

近藤文里 2009 絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用. 平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書. 1-81.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 文里 (KONDO FUMISATO)
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号：00133489

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし